

白山ふるさと文学賞

第十二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 作文の部 優秀賞

「地域の大切さを次世代へ」

鶴来高校三年

中川なかがわ

百華ももか

高校二年生の冬、私は地域のために貢献できる活動を行い、地域の大切さを次世代へと繋ぎたいという夢が生まれた。

きっかけは、「地域研究会」という同好会に入部したこと、「和太鼓部」に入部したことだった。地域研究会では、鶴来地域の伝統的なお祭りである「ほうらい祭り」で、鶴来の歴史や伝統文化について調査して発表したり、地元の小中学校へ出向いて、「白山手取川ジオパーク」や、鶴来高校が行っている地域貢献活動について報告したりした。そこでは、小中学生が地域のことをどう思っているのかを知ることとなった。意外なことに、彼らの中には『ジオパーク』という言葉の意味すら全く知らなかった子どもたちが多くいたのには驚いた。この状況を目の当たりにして、地域をより良くしていくためには、自分たちだけが頑張れば上手くいく訳ではなく、多くの方に知っていただく、つまり、広く情報を伝え、共有することが重要なのだと痛感した。

そして、高校二年生の秋、今までの活動を生かして、「日本ジオパーク全国大会白山手取川大会」に出場した。この大会には、全国から多くのジオパーク関係者が集い、それぞれが抱える地域の課題に対するの解決策を発表し合い、他地域の魅力を理解・発見し、数々の新たな発想や知恵を吸収できた。このような機会を得て、「ジオパーク」に関わって生きるということをライフワークとし、更に知識を深め、地域の方々の関わりを今以上に大事にしていきたいと思った。また、他府県のジオパークとはどのようなものなのか、どのような歴史を有しているのかを、実際にその地を訪問して体感したいと切に思った。

そこで、今までの高校生活の中で培った地域探究への興味や関心、知識を深化させたいという情熱が沸き起り、将来は、地域の発展や伝統文化の継承者として貢献するために、大学に進学し、地域についての学問に邁進しようと決意した。これまでの地域研究会の活動は、部員の皆と一緒に、先生とよく相談しつつ行ってきた。しかし、

私自身の思考力や判断力、表現力を向上させるためには、私一人で調査研究し、その成果を、私一人で多くの聴衆の前で、臆せず発表することが重要になってくることに気づいた。そこで、高校三年生のこの夏に、「地域探究プログラム能登オリエンテーション合宿」に参加し、能登地域の伝統や地域内の諸課題について探究した。三日間にわたり、「伝統文化である獅子舞を活性化させるためには」というテーマを軸として、自身の考える課題とその解決策、解決することで期待される効果などを発表した。実際に獅子舞を目の前で見たり、獅子頭や他の道具に触れたり、専門家の方にお話を伺ったりしながら、今までに体験したことがなかった、数々の貴重な伝統文化を学ぶことができた、大変有意義な合宿となった。

また、私のもう一つの活動の軸である「和太鼓部」では、年に一度だけ開催される、「日本太鼓ジュニアコンクール石川県大会」に向け、日々猛烈に練習を積み重ねてきた。その合間を縫うようにして、地域交流のために、地元の公民館主催の行事に参加したり、鶴来商工会主催の、様々なイベントにも参加したりして、演奏のみならず、太鼓にも実際に触れてもらうなどして、交流を深めてきた。このような取組みを経て、演奏者である私達と、舞台を用意してくださったスタッフの方々や、演奏を聞いてくださった地域の住民の皆さんとの距離が縮まり、温かい一体感が生まれ、受け入れられたという実感と、応援しているよという声援を感じ、感動が回を重ねることに強くなってきたのだった。和太鼓を体験しに来てくれた幼稚園児たちは、「私も小学生になったら和太鼓を習ってみたい。」と笑顔一杯で言ってくれ、とてもうれしかった。和太鼓を通じ、子ども達とコミュニケーションの輪を広げられると感じ、やはり、実際に体験するということは、何事においても重要なことなのだと思う。また、コンクールでは、演奏仲間と気持ちを一つにすることの大切さを知った出来事があった。本番直前で部長が病気で演奏できなくなり、副部長の私が部員をまとめ

ないといけない立場となり、とても緊張した。しかし、このピンチで部員たちに一体感が生まれ、今までに無い力のこもった演奏ができ、賞まで頂くことさえできてしまった。なるほど逆境は、全員を一つにまとめる上で大切なのだと実感できた。

しかし、私は自分一人でやってみることに挑戦したい。そうすることで、フットワークも軽く、地域に飛び込んで行け、新たな仲間や交流が生まれるのではないかと強く思うからだ。これからの未来、地域をより良くしていくためには、若者の力が不可欠だと思う。だからこそ私は、地域の大切さを、次世代に確実に繋げていかなければならないと確信しており、今後も行動し続けていく。

